

# 造林事業無災害5か年を支えた安全活動について

久々野営林署 黒田 安夫

## はじめに

私達の勤務している久々野営林署の造林事業は、昭和49年7月から無災害を続けている。当署の造林事業における過去の災害は、次のような結果であり、41年の4件、46年の8件を除いては、ゼロまたは1～2件と、まあまあの成績で推移してきたが、無災害が2年連続することはなかったのである。

表-1 過去10年間の災害発生件数

年 度	40	41	42	43	44	45	46	47	48	49
件 数	2	4	0	1	0	1	3	0	1	1

主たる原因	}	• 足場に起因するもの	6 件
		• オートバイ転倒	1 件
		• 目に異物が入る	2 件
		• 手元狂い、滑り	4 件
		計	13 件

そうしているうちに、49年6月、下刈に入ったばかりの時、刈払機による事故が発生した。

この事実一同驚愕するとともに、これは大変なことだ、このままいけば、3件、4件と災害件数も増え、また重大災害になることは必至だ、何とかしなければ、という気持が全職場に伝播した。

そこで、従来行ってきた安全活動は、本当に自分達の物だったのだろうか、何か欠けているのではないか、安全意識の昂揚に何かよい方法がないか、など安全衛生委員会、安全懇談会、安全常会など、あらゆる組織を通じ真剣に討議をしたが、いずれも、今まで行ってきたことと大差のないことばかりであった。

このような経過をたどる中で、いつとはなしに全作業員の中に、自分達のやっていることは形式にとられ過ぎでないか、俺達はそんなことを言われなくとも知っているなど、既成の概念の中で空転していることに気づき、これでは駄目だ、何事も我流では一定のところまでは進歩するが、それ以上の壁は突き破れない。それが証拠には、過去2年連続して無災害の年はあったかに目をつけ、この年の安全大会を契機に、難しいことはともかく原点に戻って、新規採用者になったつもりでやろうということから

出発した次第である。

## 安全活動の内容

5年間の活動は2つに分けられる。

前期（49～52年）は、基本動作の定着と集団の和を主眼にし、それに各担当区の独自性を加えて、本格的な自分達のための安全活動の取組みに入った。

この場合推進方法としては、職制を通じた指導を主としてなされた。即ち新規採用者に対する方法そのものである。

主任、係員、班長、安全推進員、安全当番、これらが中心となって行われたわけである。勿論これ以外に、安全衛生委員会の行う安全点検、計画的に行う担当区相互安全パトロール等も行われた。

前期の目標として、

### 1. 足場の注意

造林事業は面の作業であり歩行距離が延びる、又、過去の災害18件中、足場に起因する災害が6件を占めている。

### 2. 基本動作の定着化

基本動作の欠如により発生する災害がほとんどである。

### 3. よりよいチーム作り

明るい職場と連帯意識を深める。

造林事業における安全の3本柱とし「無災害3年に挑戦する」を合言葉に立ち向ったのである。

この結果、全員一丸となった努力の甲斐があって、52年6月、始めて3年無災害の目標を達成した。そこで後期の活動は、3か年の経過をもとに、指導される活動から自から行う活動にと、一歩前進した目標を掲げ、5か年の無災害を目指し再スタートしたのである。

後期（53年～54年）の目標として3本の柱を定め、前期同様の努力を続けた。

### 1. 足場の注意

造林事業は何年たっても歩く作業である。

### 2. 相互注意の励行

基本動作の定着、よいチームワークをもとに自分の安全のみにとどまらず、班全員の安全を確保する。

### 3. 300事故の摘出

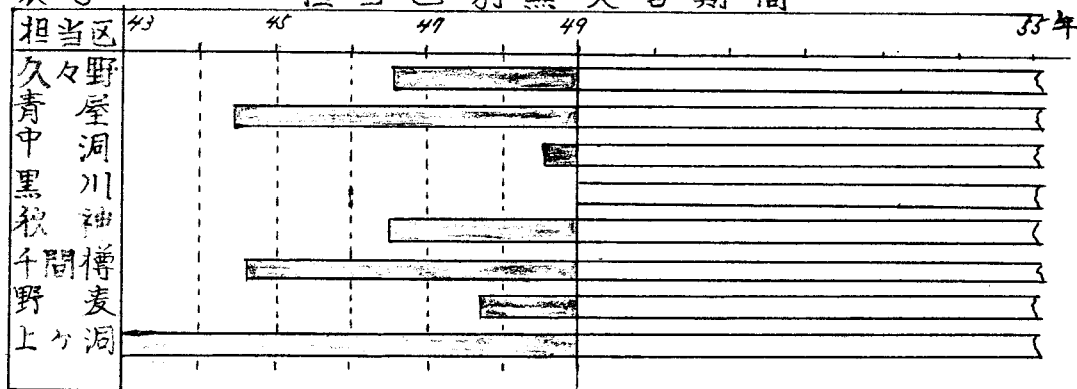
3か年間、災害は発生しなかったが、不休災害はままあるため、重大災害発生の芽を摘み取る。

5年間における造林事業量と、担当区別無災害期間は、下記のとおりである。

表-2 久々野営林署、無災害5年間の事業量

作業	地拵	植付	下刈	つる切	除伐	枝打	保護	その他	計
面積 ha	491	473	3,158	753	1,084	127	—	—	6,086
延人員人	7,802	6,706	9,501	1,363	5,427	1,693	4,328	11,755	48,576

表-3 担当区別無災害期間



### 5年間の足跡

目標は、造林事業として統一した大きな柱であって、それ以外に各現場とも創意工夫をし、多種多様な安全活動をやってきた。

例えば、鉋、鎌の滑り止めの着用、皆んなで話し合い、皆んなで守る、お互いに助け合う等あげれば枚挙にいとまがない。

このことは、我が署に限ったことでなく、他署でも同じようなことが行われていると思う、とすれば何が無災害5年を支えたのであろうか。

昨年夏、無災害5年の目標を達成したとき、各現場において反省と今後の安全活動について討議した中より感じたことは、無災害を目指して出発したその日の気持を、毎日積み重ねたことにあると思う。

### おわりに

以上発表した経緯をたどり今日までしたが、この成果は、

1. 災害は努力次第で無くすることができる。
2. やればできるという自信がついた。

3. 何事も努力すれば必ず報われる。

4. 自分達で築きあげた安全である。

このような尊い教訓を自から生み出すことが出来た。このことは、ひとり目標達成の喜びにとどまらず、人生の教訓としてもあてはまることである。

ジェット機が大空を飛べるのも、企業が宣伝に力を入れるのも、それぞれの目的に向って全力を出しているからで、エンジンを停止すれば、宣伝をおろそかにすれば、たちまち危機に陥ることになる。

安全もこれと全く同様で、この結果に自惚れ、災害はもう起らない、などと思ったらたちまち災害に見舞われることは必定である。

これからは、無災害8年を目指して「初心にかえり、5年間実行してきたことを、更に強力に実行する」を大きな柱とし、これに創意工夫を重ね努力することは勿論、全員一丸となって、災害のない著作りに邁進する所存である。